

待つという工程。



ウイスキーが熟成することで味に深みが出るように、より高品質な発色、安定性を導くためには油絵具にも「熟成」が不可欠です。「熟成」は練りあがった絵具の空気を抜くことから始まります。そして空気を完全に追い出した絵具は、自然熟成に入り、空気を遮断した安定的な空間で一定期間寝かせ、なじませます。ホルベイン油絵具のやわらかな質感と発色には、「待つ」という工程も必要なのです。ホルベインの命は品質です。

●油絵具20号(110 ml)チューブ、全40色新登場。大きいサイズでも品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-10-4 TEL.03(2942)9211 大阪府東大阪市上小島1-9-10 TEL.06(6723)1514



holbein

ホルベイン絵具
www.holbein-works.co.jp

holbein

小林正人

絵画から星空までの距離

鷹見明彦 文 森田ケン 写真・印



1985年、東京・国立のアトリエにて。《天窓》制作中のポートレイト。このころから、キャンバスを張りながら同時に手で直に描いていく試みを行っていた 撮影=湯浅明美



天使=絵画 1983-84 キャンバスに油彩、木炭 130x160cm

1984

「眼に見えないものを
眼に見えるようにする
。アーティストの役割が
果たされるなら、
世界は、少しずつ明るくなって
いくはずだ」

画家がベルギーのセントに移り住んでから、六年あまりが経った。そのパシオネットな作品とともに、ある意味では死語になりつつある、画家といふことばの響きが、これほど似合う作家も今日稀らしい……。帰国のタイミングをとらえて話を聞いたが、「画家」をモデルとする映画の主人公が、みずから物語を語り出したようなひとときだった。

「少年のころのアイドルは、キュリー夫人でした。眼には見えない結晶を仮定して、鉱石からラジウムを取り出そうと身を賭して実験をつづけるのですが、最後にあるはずのものがない……。それがあある夜、光って見えたのです。確信によつて、見えないものが見えるよつになる。そう信じられた日から、毎日夜空を見上げて、眼を洗うようになりました。毎夜、怠けずに、星空に眸を見開いて、眼を洗う……。画家の話に、天使を描いた初期作やいつも科学者のように白衣を着て制作していたという伝説が思い浮んだが、教

1990

「キャンバスを張ってから描くのでは、遅すぎる。
張れたときには、絵はすでに描かれていなければ」



空戦 1990 キャンバスにペンキ 各117×91cm 個人蔵 撮影=内田芳孝

一会の神父だった祖父から、「神と創造」について聞かされたという少年期の影響もおもい描かれた。

優等生からバイクを乗り回す「落第生」に変貌した高校時代の少年を、「画家への道に向かわせたのは、音楽教師だったひとりの女性との恋愛だった。」先生を、ものにすることしか頭になかったある日、家に招かれて行ってみると、新品の油絵セットが用意されていたんです。お絵描きなんて冗談じゃないとおもって、ヌードのモデルになってくれるなら描くとしたら、意外にもなる」と。

「先生の部屋のドアを開けて、ベッドに横たわる白い身体を見たとき、その綺麗さにびっくりして、頭が真っ白になりました」。見ているだけで、「眼で描く」歓びがあった。そして描けるはずのない白いキャンバスが……鮮明な、画家誕生の瞬間だった。

あとで訊いてみると、たまたま美術の教室に置いてあった生徒たちの宿題の絵を見るなかで、眼にとまっていたいばん好きな絵が、小林の作品だったという。



画 1993 キャンバスに油彩 198×262.5cm
гент市現代美術館蔵 撮影=成田弘

たださぼりたくて屋上から描いたプールの絵だったが、その美しさに先生は、絵なら不良を更生させられるかもしれないと考えた。ふたりは、ともに高校をやめることにもなったが、小林は、芸大をめざした。

最初の受験は、実技の一日目で放棄したが、自分でラファエロの絵や素描などを模倣して学んだ。「デッサン力やテクニクは、絵のためには役に立たない。要するに一本の線をひく自由もあれば、ひかない自由もある。」

ベルギー、ゲントのスタジオ。駅に近い通り沿いのビルの二階だが、まわりの環境は静か。緑のカーテンの奥にキッチンとベッドがある
Photo Dirk Pauwells



2001 「『きみをゲントに呼んだのは、いまできみがやってきたことが理由ではなく、これからきみがやろうとしていることのためなんだ』と、ヤン・フートは最初に言いました」

つよじコンセプトがあれば、手はついでくる」。

東京芸大の卒業制作《天使》(一九八四)では、キャンパスの白い空間が木炭の描線と最小限の油彩によつて探られている。「形や色は、それだけ取り出せるものではなく、いつもまわりの空間とともにある」。

小林によれば、キャンパスは、「天使的な存在」だといふ。それは本来、男でも女でもなく、重さをもたない。何が描かれているかよりも、存在の仕方」が問題なのだ……。天使が棲める空を描こうとしたのが、《絵画》空(一九八五、八六)のシリーズ。この時期、国立の外れのビルのアトリエに移る。

《空戦》(一九九〇)には、青ペンキで木枠、ペンキ缶、脚立など絵を描くのに使った道具とアトリエの空間がピンホール・カメラの写像のように描かれている。「空や天窓を描いていた八五年ころ、キャンパスを張ってから描くのでは遅すぎる気がして、そ

の後キャンパスを張りながら描くことをはじめました。筆ではなく、手で直に描いたり布で拭いたりしながら、キャンパスが張れたときにはすでに絵もできていなければなりません」。

《空戦》のタイトルは、当時日本とカナダに離れて暮らしながら闘病中だった先生に指輪を贈るのに、くり抜いてケースにした本がフランスの撃墜王の戦記だったことに由来している。この作品が描かれた翌年の春に、彼女は亡くなり、その訃報に絶望の淵へとき落とされた。生きる希望をなくして自失した時間のなかから生まれたのが、《絵画の子》(一九九二)の連作だった。「アトリエで消えていた彼女の明るさを集めて、ふたりの子供をつくって育てようとおもいました」。

だが不幸はつづいて、次の年にはふたりを見守ってくれた彼女の母も急逝する。《画》(一九九三)の三つのリンゴは、亡き彼女とその母と自分のために描いた。



Unnamed 2003 #1 2003 油彩、キャンバス、木枠、絵具チューブ 60×106×12cm
空から地に降りて肉体を獲得した 絵画 に添えられるのは、「星からきた」サファイア・ブルーのチューブ *

こばやし・まさと 1957年東京生まれ。84年、東京芸術大学美術学部油画専攻卒業。94年VOCA展奨励賞。96年第23回サンパウロ・ビエンナーレ日本代表。97年よりゲント(ベルギー)を拠点に活動。おもな個展に85年鎌倉画廊、86年以降は佐谷画廊、SHUGOARTS(東京)で発表する。2000年「小林正人」展(宮城県美術館) 2001年「A Son of Painting」展(ゲント市現代美術館) 2002年ライス・ギャラリー(東京)など。グループ展には、89年「現代美術への視点 色彩とモノクローム」展(東京国立近代美術館、京都国立近代美術館)「ドローイングの現在」展(国立国際美術館) 95年「視ることのアレゴリー 1995: 絵画・彫刻の現在」展(セゾン美術館)「現代美術への視点 絵画、唯一なるもの」展(東京国立近代美術館ほか) 96年「赤い扉」展(ゲント市現代美術館) 00年「オーバー・ジ・エッジズ」展(ゲント市現代美術館) 01年「先立未来」展(ルイジ・ベッチ美術館(ピエラ/イタリア)) 03年「ティラナ・ビエンナーレ: U-TOPOS (アルバニア) など。



一時帰国中、SHUGOARTS(東京)にて。
背景の作品は、『#21(on the wall)』(2002) *

「僕は自分の絵画を生かすことしかできない。」

その絵を東京で開催された、水の波紋」展(一九九五)のために来日したヤン・フートが見て、買い上げ、それがきっかけでベルギーのゲントに招かれた。以来、ヤン・フートが住む同じ通りにスタジオを構えて制作をつづけている。

「(キャンバスを張りながら描く手法によって)壁にかけるとグラフィックになっていた絵を、床に置いてみるように言ってくれたのも、ヤンでした。おかげでどんどん自由になつて、フリームが出てきたりしました。」

新作の《Unnamed 2003 #1》(二〇〇三)では、床に据えられた油彩のヌードに絵具のチューブが添えられている。「チューブを夜空に投げ、それが星になればいい……」。

天使の空に生まれて、ゲントで地に降りて受肉した絵画は、眼を洗う夜空に光る星へと還っていく。

(二〇〇三年七月二十三日、東京・新川のSHUGOARTSにて取材)

たかみ・あきひこ「美術評論家」